

(2)貧困の原因に「散祿賜」がある。著者はそれを貧困の原因としてしか意味づけていないが、貧困となるにもかかわらず「散祿賜」するのは何故かという問題があるのではなからうか。評者は、官僚たるもの清潔たるべし、財を貪ってはならぬという當時の價值理念がその行爲の基底に存するのではないかと思う。しかも「散」する對象は大體宗族が多い。このように考えると、「散祿賜」とは、官僚の倫理的要請から起り、宗族との精神的連絡を保つための手段だという解釋も可能になると思う。その意味で、彼らはきわめて自覺的な存在なのであって、貧困であればあるほど寄生的性格がうすいという解釋も成り立ち得るのではなからうか。

以上が「寄生官僚制」説に對する評者の疑問であるが、「寄生官僚制」展開の原動力Ⅱ主要因は何か、更に、一次、二次、三次と劃期されたそれぞれの門閥社會に質的相違があるのかどうかといった疑問が、通讀するうちに湧いてきたことを附け加えておく。

最後に、本書全體に對する感想を述べて拙評をおわることにした。

著者は、本書を通じて、この時期の社會は私的利害關係によつて展開すると、暗に主張しておられるように評者には受取れた。著者はそれをネガティブなものとして考えておられるだらうが、果してこの時期の社會はそのような私的利害關係のみによつて動いているだらうか。評者は、私的利害關係による動きとそれを克服しようとする動きが對立・媒介し合っているところにこそ、この時期の歴史展開の原動力が存すると思うのだが、それでは、それらがどのように對立・媒介し合っているのか、この點も本書を通讀して考えさせられた問題の一つである。

(東 晉次)

モンゴル秘史——チンギス・カン物語——

村上正 二譯注

平凡社(東洋文庫一六三 二〇九 二九四) B 40 判
全三卷 1 昭和四十五年五月 三五五頁(地圖系圖
各一葉)、2 昭和四十七年四月 四三三頁、3 昭
和五十一年八月 四四六頁(通卷索引、地圖一葉)

本書は、チンギス汗時代のモンゴルに關する最も主要な史料の一つである『元朝秘史』全卷の譯注で、底本には四部叢刊本を用いる。全十二卷を三部に分け、1(卷一〜四)、2(卷五〜八)、3(卷九〜十二)と收められており、總頁數は千頁を優に越える壓倒的な鉅冊となっている。本譯注に先立つて、我國には四種の翻譯が刊行されていたが、今回の村上氏の譯業の日本に於ける「秘史翻譯史上」の位置を確認する爲の前提として、それらを列舉してみよう。

一 那珂通世 一九〇七年 『成吉思汗實錄』 大日本圖書〔底本
Ⅱ文廷式寫本〕

〈新版(一九四三年筑摩書房)には各種索引、文獻目錄、その他の付載を加える。但し、元版と頁當り行數が異なるので、頁數にズレが生じ、參照引用に多大の障礙を來たすに至った〉

二 小林高四郎 一九四〇年 『蒙古の秘史』 生活社〔底本Ⅱ葉
德輝本及び四部叢刊本〕

へなお、同氏『元朝秘史の研究』(日本學術振興會 一九五四

年)の序文に、この譯本の他「譯注、研究篇、語彙辭典、校勘記があり、何れも別に刊行する豫定である」(序文三頁)、というが、まだ實現には至っていない。また、特に譯注については「私は既に之が全面的改訂を畢へたので、やがて面目を一新して公刊されるであろう」(同前書二頁)と見えるが、未だ上梓をみていない。これらの豫告や、該譯書の注の量などから推察すると、これは試譯的な存在だったのかもしれない。

三 山口修 一九六一年『ジギスカン實録』筑摩書房 世界ノンフィクション全集22(一三三〜三〇四頁)〔底本||明記せず〕

〈後述する通り、幾つかの新機軸と、隨處に挿入された系圖、地圖などの配慮によって、所謂「一般向け」の譯として、一つの有りうべきモデルとなっている〉

四 岩村忍 一九六三年『元朝秘史―チンギス・カン實録』中公論社 中公新書一八〔底本||明記せず〕

〈「リीडブルな形」で、一般に「秘史」を伝えるという趣旨により、適宜省略に従う。即ち、嚴密にいえば、完譯ではない〉

以上の如くである(この他に、一九一七年に朝鮮研究會(京城)から刊行された『元朝秘史註』があるが、これは李文田『元朝秘史註』よりの再譯であり、一應除外した)。なお、ここでは非一言しておきたいのは、これら翻譯の内、眞の意味での譯注——即ち、全巻にわたって仔細に問題點を捉え、かつ検討するという作業を徹底して行なっているもの——と自他ともに首肯しうるのは、那珂(一九〇七)に限られてしまうという現象である。

さて、右の如き『秘史』翻譯状況を念頭に置いて、最近の『秘史』研究に見られるトピックを探ってみると、最も重要なものとして、その年代記的側面(とりわけ年代記述)に於ける明白な歪曲が、正しくも指摘された事を挙げよう(吉田順一「元朝秘史の歴史性―その年代記的側面の検討―」『史觀』七八、一九六八年など)。そして、この方面からの考察は、『秘史』の普通の意味での史料としての價值さえも、全面的に否むような極論まで生んだ。しかし『秘史』の重要性は、これら新しい視點からの假借ない検討にも拘らず、總體としては、さほど減失されはしなかったようである。というのも、『秘史』には、啻に狭い意味での「年代記」としての一面のみならず、別の見地からの批判的な考察を誘起督勵し、またそれを徒勞に終らせないだけの、多面的な「史料」としての屬性が確固として存在しているからに他ならない。それどころか、見方を變えれば、『秘史』への精密かつ多様な比較點檢という新たな方法によるこの種の研究の出現によって、我々は該史料に廣大な未開拓の研究分野が横たわっている事に、改めて思いを致すに至ったといえよう。

このような研究上の新たな局面に立ち、『秘史』學の進展に更に拍車を加えるかのように、今問題にしている村上正二氏の最新の譯注が、前後七年を要してこの程ようやく完結をみたのである。

この、本邦第五番目の新譯注は、先行の諸譯業に對して、どのような意味をもっているのだろうか。何よりも先づ、喜びをもって言いたいのは、本書が、譯注者自身のモンゴル學者としての赫々たるキャリアの、實り多き中間報告であると同時に、『秘史』研究史上に眞に意義深いマイルストーンとして位置づけしうる内容をもつ

ているという事である。

冒頭にも列擧したように、元來我國は『秘史』の翻譯の最多產國であるといえる。それは『秘史』研究の黎明期に初めて公刊された譯注——即ち那珂（一九〇七）——が、この國の言葉で爲されたこと、しかもその質たるや、本書に於いても「最近相ついで現われた内外の碩學の『秘史』の譯注書に比して、この那珂の『實錄』が放つ燦然たる光芒は、いまだに毫末の衰えを見せていない」（2のiv頁）といわれる如く、驚異的に高い水準を示していた、という事情に基づくところ大であった。換言すれば、我々は、誇りを以て依據しうる『秘史』の譯注を、世界に先驅けて得る事ができた（或いは、得てしまった）のである。この偉大な先學の手で、しかも殆んど獨力で開墾された地に、そのあとモンゴル學の豊かな結實が何ほどか有りえたのも蓋し當然といえよう。我々は、本書の出現によつて、實に七十年の長きを閲して、遂に碩儒那珂通世の記念碑的な譯業に對する誠實な改訂を得た思いである。草創期の巨星も以て瞑すべし、といえよう。

勿論、前述の如く、何種かの譯業がこの間に刊行されたし、その夫々に見るべき收穫があつた事も否定できない。ところで我々は、それら後續の譯書の刊行意圖に、奇しくも共通する姿勢を見出しうるであらう。即ち、那珂の譯文をは難解であると評し、一般用にもつと読み易い形のものを提供する、というのがそれである。確かに那珂の格調の高い擬古文には、斯様な指摘を招く節もなくはない。しかし、それにしても、筆者の個人的見解としては、あの周到な配慮——『實錄』の序論を一見せよ——を行なつた上での蒼古の趣きを湛えた譯文が、理解し難い程にまで、我國の文運が凋落したとは

思えないのであるが……。筆者のこの考えは、現在に至るまで『秘史』の引用が、大抵那珂の譯文を以て爲されている事實によつても、ある程度裏付けられよう。那珂の譯業にも、誤譯がたまか見える事は周知の如くである。小林（一九四〇）が、その序文中で「歴史家は何等の批判もなく實錄を引用して立論の根據とする」（序文六頁）弊を論難したのも、その邊の事情に基づくのであらう。しかし、これは全くその責めを斯かる引用者に歸すべき性質のものであつて、およそ原文と校合校正しないで「批判もなく」譯文を引用するなど、寧ろその事自體が異常なのである。引用される側の譯書の瑕瑾と、引用者の見識とは全く別の問題ではないだらうか。筆者は、例えば小林（一九四〇）の「解題」に「ほんの一例」（二〇頁）として掲げられたような、那珂の誤りのあり方が、遂に何人の手によつてもきちんとした形で整理されなかつたのを、那珂の譯注と『秘史』研究の進歩の爲に惜しむものである。若しそのようなマニュアル形式のものがあつたとすれば、それは那珂の孤獨な苦闘を顯彰し、またその後學への身に刺る學恩に對する何よりも眞摯な返禮となつたであらうし、當然「無批判な引用」というような不幸な事態も避けえたであらう。そして那珂の推蔽の限りを盡した譯注は、益々定譯としての位置を固めて、常に今日的なものとして有效な利用をされた事であらう。新たな工夫を凝らした素譯を續出させる事よりも、寧ろ今述べたような地味な檢討作業こそが行なわれるべきではなかつたか。

ところで本書の序文にも、この一種定型化した「那珂＝難解」のパターンが現われている。にも拘らず、結果としてその譯業は、屋上屋を重ねるの弊に陷る事は——幸いにして——なかつた。ここで

の譯注者の眞の狙いが、「一般向け」の読み易い新譯を提供するに
あつただけでない事は、彫心鍊骨の極みとでもいうべき韻文の譯を
一瞥すれば思い半ばにすぎるであらう。思念の限りを盡した概さえ
ある一つ一つの譯語は、「平易な改譯」を、という當初の指定とは
間々相容れぬようには見えないだろうか。

徒し事めいた前置きはさて置き、膨大な本書のメリットに注目し
てみよう。先ず第一に、また當然の事乍ら、それが譯注というスタ
イルをとっている點である。これだけの密度の注を付すという事
は、單に譯注者の數十年に亙る『秘史』研究の、そしてモンゴル學
の知見の巨大な蓄積を壓縮して開陳するという極めて價值ある作
業、との評價だけに留まるものではない。この場合のように、史料
の翻譯という時には、注は譯者の知っている事と知らない事とを、
冷厳なまでに第三者に告げる標識ともなりうるのである。またそれ
は、傍譯及び總譯の二つのヒントにより、不明の部分を糊塗して譯
し去るという、考え様によつては誘惑的な捷徑を自らの手で塞ぐ事
と同義である（何といつても『秘史』は、總譯をいわば重譯してい
ても、その旨明記せぬ限り、第三者にはその邊の事情は辨別し難
い、という事が論理的には可能である、そのような危険な構造を本
來的にもっているのだから）。ともかく、この夥しい量の注により、
我々は『秘史』をめぐる研究がどの段階にあるのか、或いはどれだけ
の問題が解決され、或いは考察を拒んで立ち塞がっているか、とい
う事までも一貫して知りうるに至つた。これは私的な感慨であるが、
筆者の如く研究のとは口についたばかりで、その關心も極めて偏狹
という者にとっては、これら諸問題點を通覽しうる事の有難さは一
入身に泌みるのである。この意味で、特に今回の『秘史』の邦譯は

譯注者に人を得たと確言する事ができよう。

第二に、すぐれて外見上の問題であるが、邦譯としては初めて
「節」による表示を採用している事である。我國のモンゴル學、就
中今問題にしている『秘史』の譯業は、かくも多きを數えるわりに
は、諸外國で言及される事が少ないようである。それには、日本語
の言語的少數性、國際交流の不足など様々な要素が錯綜しているの
であらうが、『秘史』研究に限つてみれば、先づその引用の際の表
示形式の差異に誰しも氣がつこう。歐米の『秘史』研究は、各段落
毎にその末尾に小字で總譯が付される、區切りの判り易い原典の敘
述様式に基づいて、節（一つの段落）によつて或る個所を示す方法
が夙より定着していた（當然そこでは、卷數は第二義となる）。そ
れに對し我國では、傳統的な漢籍の引用表示形式を襲い、卷數が第
一の要件となり、その次に何葉目、何行と表わされるのが常であつ
た（勿論、言語學的研究などで、文中の或る特定の單語を示す時な
どは、内外を問わず卷・葉・行の表示に従う）。そして、我國のこ
の舊套（或いは傳統）は、本書が出現するまで墨守され續けた。こ
のテクニカルな齟齬は、彼我相互に無視し難い阻害要因であり續け
たものと思われる。我々は、歐米の『秘史』研究の參照に便なるよ
うにとて、自分の手で節の通し番號を書き込む勞から遂に解放され
た。諸外國の研究者也、この行き届いた處置によつて、多くの恩恵
を受ける事になるだろう。近來の慶事というべき配慮である。

第三に、『秘史』のいわば「さわり」である韻文の部分を完全に改
行して、他から明瞭に區分している事も見逃せぬ處置である。これ
は、本邦の譯としては、曾て山口（一九六一）にも採用されたシス
テムであるが、本書は更にそれを徹底している。この韻文の部分が、

『秘史』が含み持つ様々の性格の一つ——即ち英雄敘事詩的な要素——を代表している事は周知の如くであるが、このように視覚的にも際立てられると、愈々その方向の考察の必要性を痛感せざるをえないであろう。併せて我々は、モンゴルの學者が説く、『秘史』に先立つ無文獻時代を、口承文藝の時代と位置づける、周知の通りの息の長い設定を、眞剣に傾聴し検討する必要がある。

第四に、『秘史』の史料としての性格に對する見解が述べられて、いる事が注目される。前述吉田氏の研究以來、年代記としての『秘史』の史料價值が批判的となつてきたが、逆にそれを積極的に認めようとする譯注者の立場からの、一番新しい段階に於ける様々の指摘は、説得的な部分を多く含んでいる。例えば、『秘史』の歴史記述の手法は、「編年體的記述様式」によるものではなく、「物語的記述様式」とでもいふべき獨特の方法論に據つてゐる部分がある、との新しい定義が提出されている（1の三一七頁）。また『秘史』に多く見られる、虚實不分明の記述に就いては、「バルジュナの水飲み」の部分の注で言及し、傳承に基づく虚構が混入しているからといつて、全てをその觀點から斷ずれば、「チンギス・カンの傳記自體が虚構の歴史と見なされてしまふ危険も生じて來よう。歴史敘述における眞實と虚構にかかわる問題として」（2の二〇頁）斯かる敘述は取扱ふべきである、という主張も見られる。この史料批判上の心得の原點に立ち返つての意見は、ともすれば度を過こしがちともいえるような『秘史』の史料價值に對する指彈に應えた、穩健ではあるが、またそれだけに搖ぎない鐵案といえるのではないだろうか。なお、譯注者の、『秘史』の史料的價值への疑問が明らかなる形で提示された段階以降に於ける、本見解に先立つ、史料として

の『秘史』觀は、一九六八年の時點でのものが知りうる（野尻湖クリルタイの『秘史』シンポジウム席上での發言。その記録は、岡田英弘「第五回野尻湖クリルタイ」「アジア・アフリカ言語文化研究」二、一九六九年、二二〇頁に見える）が、その際のものとは比べても、今回の諸言及は遙かに積極的な姿勢から爲されているように思われる。

第五に、系圖や地圖などの視覚的な援助が必要に應じて隨處に挿入されているものも有難い。1の巻末に付された「モンゴル部族の系圖」では、同時代史料との校定の上で圖化されているので、各史料による名稱の異同が一目瞭然に示されている。それ以外の諸系圖の中でも譯注者は、從來通行していた世上の錯誤を、該時代研究の成果によつて良く批正している。今後、本書で提示された系圖群が、検討されるべきスタンダードとして傳えられるであらう。なお那珂新版（一九四三）、小林（一九四〇）に續いて、本書にもかなり精細な索引がある。これによつて本文中の語彙は勿論のこと、譯注者の膨大な知見を傾注した多數の注も檢索できる（注の頁數はイタリック體活字で表示され、本文中の語彙と容易に區別しうる處理がなされている）。但し、注のうちの興味深い考察の幾つかが、索引に登録されていないのは残念である（はんの數例を挙げると、『空色の盃』2の一八一頁、「サチュリ」1の一七一頁、「ジャダ」1の三三四頁、「ダグタイ」2の一七四頁、「莫州」3の一四八頁等々）。如上の、いわば附録的な幾つかの措置は、本書の有用性を更に高めているといえよう。

さて、本書には、まだまだ稱揚すべき美點が残されているが、書評と銘うつつ以上、小文を單なる舌足らずの頌詞に終わらせるわけ

にも行かない。そこで、以下に筆者なりの疑問点を幾つか呈して譯注者の御教示を乞いたい。

先づ、譯語の妥當性という問題である。それは、譯の方式の各要素に互っている。例示してみよう。一つには、官職名などのような「術語」の譯であり、そこでは全く目新しい譯語が一再ならず現われる。耳目に馴染んだ原語は、既にそれだけでタームとして一人歩きをしており、ましてそのタームを表題に冠した論説も少しくあるという背景に於いては、或るタームの原語表記は潜在的な生存権さえ持っているといえるであろう。より妥當性の高い譯語を摸索する努力は、勿論眞摯な譯注作業の基本的要件ではある。しかし、かと言って、一つのタームをめぐる、幾つもの譯語が併立するもの、徒らに混亂を惹起するという杞憂は別としても、常態を少しく逸した現象といえないだろうか。例えば、「ジャサウル」に「檢非違使」という譯語が與えられている(3の三五三頁)のを見た時、筆者は殆んど戸惑いに近い感を抑える事が出来なかった。そして、地名人名の如く、もっと原語への執着性が強いと思われる固有名詞にも、譯注者の深い(或いは深すぎる)譯しこみがみられる。例えば、那珂(一九〇七)で原語表記されているクストゥ・シトエン、ナラトゥ・シトエン[§ 133 (N)]は、本書では「ボブラが壘」、「松が壘」(1の二八四頁)と夫々譯し込まれているし、ールカ・サングン(那珂)は「セングン坊や」に、あの有名なシャマン、テブ・テングリは一貫して「天つ神巫」と表わされている(この「天つ神巫」なる譯語は、§ 246 (X) 冒頭の「テブ」という略稱に對し、「天つ」という譯を與える奇妙さを招いている。しかも、ユニークなこれらの譯語の殆んどが、あの精細な索引では、どういふわけか、

逆に、原語から檢索するように配列されている。そして、邦譯語は、そのうしろに括弧内に入れて付記されるだけで、譯語としては別途にエントリーされていない爲、譯語からは直接檢索しえないという不可解な仕組みになっている。折角の丹精を充分に經たと思われる譯語だけに、一旦提示したからには、本文中だけでなく、索引に於いても必要な程度に項目を確保しておくべきであつた。單に語義を明らかにする爲だけなら、注で明記すればよいし、若しそれでは視覺的に不便なのであれば、その語の直後に割注でも加えるという方法もあつたのではなからうか。ともあれ、先にも述べたように、かくも劃期的な譯業であるだけに、今後廣く一般に引用される事が豫想されるが、その際これらの新しく創出された譯語がどのように扱われるべきか、は檢討を要する課題ではある。

次に、これは毀譽褒貶が最も鋭く對立する點であらうが、譯注者が注の隨處で行なっている大膽な推測についてである。多くの場合、譯注者は「臆説」であると斷わつてはいるが、論證なし(ぬき)の新説が數多く現われている。筆者が最も注目を強いられたものを一例だけ挙げると、注の中でも何度か言及され、「解説」で改めて詳述されている、「ベキ」によつて『秘史』の原型が創造され、語りとして傳承されていったとする説(3の三九六―三九八頁)である。これは確かに『秘史』の幾つかの側面の、或る部分に對しては説得的——というよりは寧ろ魅力的——な論ではあるが、他の史料の用例はともかく、『秘史』自體の内にその傍證がないのが、この鋭い推測を決定的なものにするのを厳しく阻んでいるようである。筆者は、若しベキ層が斯様な機能をもっていたとすれば、その傳達物たる『秘史』の何處かに、語り手たるベキ自身の我田引水的な、

或いは自畫自讀的な要素が織り込まれていたり、また少なくともその痕跡くらいは残っていてもよさそうな気がするのであるが如何であろうか（「往古の言葉」を求め、翁らの教えを引いて」（§78（Ⅱ）の「一二三頁」という描寫があるが、これなどは譯注者のいうような口碑の「傳えたかた」を暗示する最も生々しいヒントなのかもしれない）。本書には、この類の、或いは更に大膽な注釋が多く目につくが、此處で検討するではない。人、或いは言うかもしれない。假令「臆測」と斷わっていても、論證を省いた推斷は學問的ではない。しかし筆者は、この種の所謂研究論文の中にはなかなか現われ難い推測は、基本的には、與え手にとつても受けとり手にとつても、プラスの評價を與えるべきものと思う。譯注者にしてみれば、そのような興味深い推測は、「暖めて」おけば、いつの日か實證の裏打ちを得て、「まとも」な專論にまで純化できるかもしれないものを、惜し氣もなくナマの形で提供するわけであるし、況んや利用者にとってみれば、考察のモメントを居ながらにして得られるのであるから。

それから、殘念乍ら、譯注者自身も2、3の「はしがき」で述べる如く、校正モレに由來すると思われる誤記が散見される點に言及せざるをえない。注の部分に用いられている小ポイント活字を見ると、校正時の恐るべき努力が脳裡にうかび、斯く誤植を言挙げするのは些か心苦しい。だが、本譯注書が依據するに足るものとして、我々が今後活用するに相應しいものと思われるだけに、そこまでの細心さが是非とも欲しかった。確かに、引用文献の頁數や、洋書の著者名や書名の誤綴など、實物にあたれば、利用者の方で誤りを發見して容易に手直しのきく場合もある。しかし、誤植が内容に直接

關する時にはそれは行かない。例を挙げよう。有名な八十八功臣のうち、主な人物には、初出時に注が付され、順位もその際に漢數字で記されるのであるが、それには約一割（厳密には88）の誤記がみられる。その誤りが誤植である事は、§202（Ⅲ）の「八十八功臣任命」を確認すれば判明するが、事柄が重要なものだけに、誤解を招く材料があるのは困る。別の所に、安全瓣として、また有益な工具として「八十八功臣表」を圖表にして、出身族名、各史料の表記などの簡單な情報盛り込む手法もあったのに、と思われる。現にそれは、那珂新版（一九四三）に見える有益な試みであつただけに、本書がそれを襲わなかつたのは少しく悔まれる。これら重要な部分の誤記の、輕率な引用による誤謬の擴大再生産（？）や、或いは「ママ」のルビをふったあざとい引用を見なくても済むようにする爲にも、何らかの形で正誤訂正が公けにされる事を望むものである。もう一つ、注記に就いて指摘したいのは、引用文献表示の方式が十分統一されておらず、また略記方法にもユレが見られる事である。これらは、豫め周到な原則さえ設定しておけば、容易に避けえたであらうに、と惜しまれる。原則の不徹底という點では、翻韻部を示す・印が忠實に付されていないのも目立つ（轉寫ならぬ、翻韻の譯語に押韻マークを付す、という事の有効性は扨措くとして）。殊に、2、3には、この押韻マークが殆んど見當らぬのは何故であらうか。譯語によつては、左（原語の片假名表記）・右（譯語の讀み）の兩方にルビを伴う爲、全部に互つてマークを付す事の困難さは或る程度想像しうるが、それにしても、全三巻のうち1だけに、それも思い出したように所々付されているのみでは、押韻表示はあらずもがな、といわざるをえない。本書の瑕瑾のうち特に目に

つくもので、利用者としては不満である（因みに、この點では、既に同様の方式によっていた山口（一九六一）が最も徹底している）。

さて、そろそろ紙幅が盡きてきたが、この拙い書評は、壯大な構造物という觀のある本書の内部に立ち入って點檢する事もなく、結局その外周を徘徊しながら、かつは只管その大なるに感嘆し、かつは表面的な疑問のみを恣意的に指摘するに終わってしまったようである。小文が斯様な形となったのは、本書以前に四種の譯を持つ我國に於いては、それら既出の譯業を總括した上で論を展開する事が必須の要件であると筆者が考えたからである。また個別的な問題については、當然各分野の專攻者が檢分されるであろうとも想像され

る。敢えて烏滯の沙汰を避けた所以である。だが結果として、小文が、本邦『祕史』翻譯史の稚拙なまとめとも、本書の紹介ともつかぬ中途半端なものとなったとすれば、譯注者及び讀者に對し申し譯ない事だが、力の及ばなかった所爲である。なお小文中に於いて、禮を失したり、誤解に基づいた言辭が、或いはあったかもしれないが、これまた筆者の未熟に由來するものである。何卒御諒恕賜わりたい。最後に、譯注者が、この調期的な業績に止まられる事なく、愈々學界を裨益する御健筆を揮われんことを、衷心よりお祈りし、今後とも我々後進を厳しく御教導下さるよう冀求してやまない。

（原山 煌）